レター

タクロリムス軟膏を使用した犬の 無菌性肉芽腫 / 化膿性肉芽腫症候群の 1 例

Sterile Granuloma/Pyogranuloma Syndrome Treated with Tacrolimus Ointment in a Dog

川野浩志^{1)*} 小沼 守²⁾ 関口麻衣子³⁾

¹⁾プリモ動物病院 相模原中央, ²⁾おぬま動物病院, ³⁾株式会社プロキオン

Kouji Kawano^{1)*}, Mamoru Onuma²⁾, Maiko Sekiguchi³⁾

¹⁾Purimo Animal Hospital, ²⁾Onuma Animal Hospital, ³⁾Procyon Corporation

症例はミニチュア・ダックスフンド、雄、未去勢、6歳齢、体重8 kg。2ヶ月前より、下顎に痒みを伴わない多発性の隆起性病変を認めたとのことで当院を受診した。初診時、下顎に多発性の丘疹(直径約6~9 mm)を認めた(図1)。皮膚を除く一般状態には異常は認められなかった。細菌性毛包炎を疑い抗生物質による治療を行ったが良化が得られず、さらに病変分布が吻部へと拡大した。下顎部皮膚を生検トレパン(5 mm, BIOPSY PUNCH; Kai Industries)により採取して、病理

組織学的検査を実施した。その結果、真皮内において毛包および付属器を主体とした著しい肉芽腫性炎症細胞浸潤を認めた(図2)。さらにグラム染色、チールニールゼン染色およびPAS染色により細菌様物質および真菌様物質が検出されなかったことから(未掲載)、本症

図1 第1病日。下顎に多発性丘疹が認められる。

図2 第33病日, 病理組織学的所見。真皮では毛包周囲性、結節性に、密で著しい肉芽腫様の炎症細胞浸潤を認める。浸潤細胞は好中球、組織球を主体とする。

*連絡先: 川野浩志(プリモ動物病院 相模原中央)
〒229-0003 神奈川県相模原市東淵野辺4-11-45
TEL 042-750-7880 FAX 042-750-7884
E-mail: dvm_kawano@vet.ne.jp

図3 第100病日．下顎の病変はほぼ消失している．

例を無菌性肉芽腫／化膿性肉芽腫症候群と診断した。

本症例では病変部が下顎周辺に限局していたため，タクロリムス軟膏による1日1回の外用療法を開始し

た。その結果，第73病日には丘疹の大きさが縮小傾向を示し，第100病日には病変の略治を認めた（図3）。

多発性病変を呈する無菌性肉芽腫／化膿性肉芽腫症候群の症例では，プレドニゾロン，アザチオプリン，テトラサイクリンとニコチン酸アミドの併用などによる治療が奏功することが過去に報告されている^{1,2)}。しかし本症例のように病変が体表の一部に限局しているような症例では，タクロリムス軟膏による外用療法も治療選択肢の一つとなりうる可能性が示唆された。

引用文献

- 1) Rothstein, E., Scott, D.W. and Riis, R.C. 1997. *J. Am. Anim. Hosp. Assoc.* 33: 540–543.
- 2) Scott, D.W., Miller, W.J. and Griffin, G.E. 2001. pp. 1136–1140. *In: Small Animal Dermatology*, WB Saunders, Philadelphia.